

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 7 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370415

研究課題名(和文) 漢魏晋南北朝隋唐に於ける『山海経』の受容について 神話と文学・社会

研究課題名(英文) The Reception of Classic of Mountains and Seas in the Han, Wei, Jin, Northern and Southern, Sui, and Tang Dynasties: Mythology, Literature, and Society

研究代表者

松浦 史子 (Matsuura, Fumiko)

二松學舎大學・文学部・准教授

研究者番号：80570952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：漢魏晋南北朝隋唐時代における『山海経』の受容について、とくに文学と社会との関わりを中心に検討した。その結果、例えば、漢唐間に誕生し、唐の行政法典『大唐六典』には最高品第の祥瑞として記録された「吉利・富貴」という名称の祥瑞の成立と受容めぐり、日本・朝鮮半島・中国周辺にのみ残る祥瑞情報を繋ぎ合わせ、以下の点を明らかにした。吉利・富貴が本来、一對の獣頭獣足の鳳凰であること、異形の博物誌『山海経』の鳳凰を継承すること、凶兆としての鳳凰(發明、焦明、肅+鳥霜+鳥、幽昌)を前提に、新たに誕生した民間的な瑞鳳であること、等である。

研究成果の概要(英文)：We examined the acceptance of Shan Hai Jing(Classic of Mountains and Seas) during the Han, Wei, Jin, Northern and Southern, Sui and Tang periods, particularly the connection between literature and society. The results include, for example, the establishment and acceptance of the auspicious nomenclature "Jili and Fugui" (Good Luck and Prosperity) originating between the Han and Tang, and recorded as omens of the highest quality in the Da Tang Liudian (The Six Statutes of the Tang Dynasty - the Tang administrative code), the assembling of information on divination surviving only in Japan, the Korean Peninsula, and the Chinese cultural sphere, and identification of the following points: Jili and Fugui were originally a pair of beast-headed/beast-footed Chinese Phoenixes, they were inherited from the phoenixes in the oddities catalog Shan Hai Jing, and they were newly-created folk omens based on the auspicious phoenix types (Eastern/Faming; Southern/Jiaoming; Western/Sushuang; Northern/Youchang).

研究分野：中国古典文学

キーワード：『天地瑞祥志』 徳興里古墳壁画 『山海経』の鳳凰 獣頭獣足の鳳凰「吉利・富貴」 瑞応図 祥瑞としての山車 ユ信・徐陵 国家讃文

1. 研究開始当初の背景

天下第一の奇書と称される『山海経』の研究は、その博物学的性格から、歴史地理・思想文学・美術・民族民俗などの多分野にわたっている。しかしこの書物が、漢魏六朝時代に於いて如何に受容されたのか、という観点からの検討は稀少であった。

『山海経』に基づく文学として著名なのは六朝初期の詩人郭璞の『山海経図讚』と、六朝中期の詩人陶淵明による『読山海経』という六朝文学だが、申請者(松浦)は六朝時代に『山海経』に関わった文学者として、新たに六朝末の江淹という詩人に注目し、従来空白状態であった六朝末の『山海経』受容の一形態を示した。江淹が、『山海経』の最古の注釈者である郭璞の神仙的文学を継承することについては、すでに高橋和巳(1968)曹道衡(1983)等に指摘されるが、江淹と『山海経』の具体的関わりについては検討が不十分であった。これに対し申請者は、江淹が『山海経』の欠を補うため、『赤泉経』という書物を編纂したという史伝に着目し、その『赤泉経』に比定される江淹「遂古篇」の検討を行った。その結果、江淹「遂古篇」は、史書の边疆志の情報等を以て『山海経』の奇異な世界の实在を証明しようとする郭璞『山海経』注の実証的精神を継承する事、さらに郭璞『山海経』注に欠ける域外の国々や仏教的世界を補う学術的試みであった事を解明した【拙稿「江淹「遂古篇」について - 郭璞『山海経』注との関わりを中心に」2007.3】。

六朝初めの詩人郭璞は『山海経』最古の注釈者だが、郭璞が『山海経』に基づき作製した『山海経図讚』(うち303編現存)に関する専論は国内外共にごく僅かであり、『山海経図讚』の一編一編を精読した研究は皆無であった。こうした状況に対し申請者は、「水の霊府」という特異な語を詠む郭璞『山海経図讚』「崑崙丘」という一編を精読し、郭璞が「崑崙」を中心とする広大な「水の宇宙観」を構想していた事を明らかにした。【拙稿「崑崙と水 - 郭璞『山海経図讚』「崑崙丘」にみる水の宇宙観」2006.3】。

郭璞『山海経図讚』や陶淵明『読山海経』は『山海経』の「図像」に基づき作成されたものである。しかし、『山海経』図に関する本格的検討は、近年、『山海経』研究の泰斗・中国社会科学院の馬昌儀元教授によって始められた明以降の『山海経』図像研究に留まる(2002,2006等)。これに対し申請者は、郭璞らが目にした『山海経』「古図」の原貌を探るため、特別研究員奨励費(DC2/PD04-08)、科学研究費(若手B10-11,12-13)等を用いて、現地文物局の協力の下、主に、漢代の画像石に彫刻される『山海経』の神話的図像を系統的に調査してきた。他方、日本にのみ現存する唐代の図像つき祥瑞専門類書である『天地瑞祥志』の研究をも進め

ており、それらの研究成果を用い、博士論文提出後には、以下の『山海経』・瑞祥関連の論文を発表した。

後漢の政治文化的中心地・河南省南陽から出土した後漢の画像石に多く描かれる「牛に似た有翼の独角獣図」の「名称・性格」を巡り、それが『山海経』に初出の「一角の武獣・兕」が、その一角という異形ゆえに、漢の讖緯説の影響の下、瑞獣の要素を帯びつつあった姿である事を指摘した【拙稿「中国南陽の漢代画像石に見る独角獣について - 『山海経』の異獣「兕」のゆくえ」2010.10】。

現在日本にのみ現存の唐代の『天地瑞祥志』(前田尊経閣文庫本)に記述される「凶事」を起こす「鳳に似た四鳥(發明・焦明・肅+鳥/霜+鳥・幽昌)」の存在に着目し、中国周辺部にのみ保存される瑞祥(図)志等の記述を併せ、本来「吉祥」であった四羽が「凶鳥」に変身し、六朝唐成立瑞祥(図)志の「鳳」の項目の冒頭に描かれる程に重視される存在となった過程を解析した。【拙稿「似鳳四凶鳥之来歴 - 以日本前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』引『楽斗図』為端緒」2011.3】(申請者によるこの「鳳に似た凶鳥(図)研究」に対する復旦大学文史研究院・孫英剛教授の批評論考について国内書に紹介【拙稿「駒場に迎える文学・歴史・芸術 - 東大から前田尊経閣文庫まで」2013.3】)。

以上の漢魏晋六朝時代における『山海経』の文献・図像の受容研究の主要部分については、2012年刊行の拙著『漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開 - 神話の時空と文学・図像』(汲古書院)に所収。

2. 研究の目的

申請者による従来の「漢魏六朝に於ける『山海経』受容および祥瑞研究」を基盤として、その対象を異民族王朝である北朝を経た隋唐に掛けて成立した文学・図像に拡張し、以下の『山海経』の受容について文献と図像の双方から多角的に検討する。

(1) **東晋・郭璞『山海経図讚』についての検討。**漢末から唐に掛けて短命の王朝の正統性を保証する為の祥瑞は急増した。一方『山海経』の原始的異獣のうち『図讚』では瑞獣として示される異形の博物は少なくないが、殆どが未検討の儘である(『図讚』一編一編を検討したのは申請者の試みのみ)。よって本研究では、漢魏晋南北朝の祥瑞図に『山海経』の異獣が頻繁に描かれる事、祥瑞を載せる緯書・志怪書が郭璞『山海経』注に多い事などに着目し、目下研究の不

十分な『図讚』の祥瑞観を考察する。

(2) 前涼・張駿『山海経図讚』についての検討。

前涼・張駿『図讚』に関する研究は皆無だが、注目すべきは張駿が郭璞と同じ南北朝初期の人である事、北朝にあって稀な漢族に連なる王朝の為政者である事である。これを踏まえ郭璞『図讚』との比較を軸に、張駿が北朝に於いて『山海経』に基づく韻文文学に託した政治的意図を検討する。

(3) 漢魏晋南北朝時代の志怪書にみる『山海経』の記載の検討。

漢魏晋南北朝に多く編まれた怪異の記録書「志怪書」には、既に『山海経』からの影響が指摘される。しかし志怪書の『山海経』の博物・異域に関する系統的研究は無いため、本研究では、漢以降の志怪書のうち『山海経』関連の博物を洗い出し、その博物・異域の選択・受容形態の中に各志怪書・作者に於ける世界観・国家観を探る。

(4) 唐代の祥瑞資料にみる『山海経』の記述の検討。

従来の『山海経』研究では、多くの王朝が乱立した六朝末から初唐にかけてとくに多く政策された一連の「祥瑞志」にみる該初の受容研究はほとんどない。しかし、とくに中国周辺地域のみに現存する祥瑞志 敦煌・唐代『瑞応図』(亀、龍、鳳凰のみ現存、一部除き未解読)や、日本・唐代『天地瑞祥志』(最善本である前田尊経閣文庫本の二十巻のうち、1、7、12、13、14、16、18、19、20が現存。未翻刻の部分が多い。)には、『山海経』に関する記述も少なくない。よって国内外初の試みとしてその佚文整理を行い、北朝鮮卑の血を引く唐王朝における『山海経』受容の一端を探る。

3. 研究の方法

「文献」と「図像」の相互照射による方法を探る。

近年、中国社会科学院の馬昌儀氏により、本格的な『山海経』図像研究が開始されたが、その対象は明代以降の図像を中心とする。これに対して、六朝の郭璞や陶淵明が目にしたとされる『山海経』古図の原貌を探るための有効資料として馬昌儀氏も注目するのが、漢代におおく彫刻された石のレリーフ画像石だが、すでに厚い層のあるその研究の成果は、『山海経』研究には十分に反映されているとはいいがたい。

このような状況を踏まえ、申請者はここ数年来、主に郭璞『山海経図讚』の図像的側面を探るため、漢代の画像石に刻まれる『山海経』関連の図像の系統的調査を継続してきた。

本研究で着目するのは、後漢時代の画像石をはじめ、漢魏晋の壁画図像にみる祥瑞図において、『山海経』の異形の博物に関する図像や経文が少なからず確認される点である。このことは、『山海経』に見るいくつかの原始的な吉凶観

持つ異獣や神格が、漢以降の讖緯思想の下、「祥瑞」として受容された可能性を示している。

このような推論に基づき本研究では、申請者による従来の『山海経』図像に関する漢代画像研究を継承しつつ、検討の対象を漢以降の墓葬画像に拡張する。一連の図像調査の成果は文献の研究成果に併せ、漢から隋唐に於ける『山海経』受容について総合的に把握してゆく。

平成 26 年度

文献研究

基本的な文献調査として、北朝異族との接点に注目しつつ、『山海経』に基づく初の韻文文学『山海経図讚』、唐代の瑞祥志の釈読・解析を行う。

(1) 郭璞には『山海経』原文には無い瑞祥観を持つ「馬」に関する『山海経図讚』がとくに多く認められる(水馬・天馬・馬・吉量・龍馬等)。これらは、いずれも天に属する「瑞馬」かつ「龍」と同一視されるという特色があるが、この点については未検討のままである。一方、南北朝～隋唐の国家讃文には「皇帝権力」を象徴する「天子の車の祥瑞」があり、そこには神話的な龍・馬が併記される特徴がある。天子の空間移動を可能とする手段こそは馬・車等の「乗り物」であることに留意しつつ、激動の魏晋 - 北朝を経た隋唐の社会・文化に於いて、『山海経』神話由来の龍・馬が「君子の祥瑞」として如何に受容・継承されたのかを解析する。

(2) 日本にのみ三種の抄本が現存する唐代の瑞祥志『天地瑞祥志』の逸文を解析。該書の第 18「禽」19「獸」には、従来未検討の『山海経』佚文・図像が少なからず見えている。第 18・19 の引用書統計(松浦)に拠れば、『山海経』の引用頻度は第 2 位。よって本研究ではその佚文の釈読をすすめるとともに、該書所載の「馬」「車」に関する各種文献の佚文・祥瑞図も併せて検討する。

図像調査

一連の基礎的文献研究と同時並行的に、夏・秋期の二度に分けて、申請者がこれまでの図像調査で培ってきた人脈、および東京大学名誉教授・小川裕充氏(中国美術史)の下で日本学術振興会 PD 研究員として会得してきた図像学の解析知識を活かし、中国でのフィールド図像調査を行う。

現在中国に於ける考古遺物の保存状態は必ずしも良好とはいえず、場所によっては野外に設置・放置されたままの状況にあり、劣化の進むものも少なくない。実際、これまでに申請者が、山東省済寧博物館、臨沂博物館、白集漢墓、茅村漢墓、海寧画像石墓等で行ってきた画像石・壁画調査では、数百点に渡る貴重な漢代画像石が野外に放置されたまま、あるいは壁画が風雨にさらされたまま風化の進む現状を目の当たりにした。このような状況下、漢魏晋時代の画像石や壁画の主たる目的は、詳細な図像

の調査・記録作図を用いた記録のほか、高感度・高画質のデジタルカメラ撮影による保存を主たる作業として行う。

平成 26 年度中には、吉林省集安から北朝鮮に群在する高句麗壁画墓を調査する。その一つである徳興里古墳に牽牛・淑女と共に描かれる獸頭鳥身・鳳凰に似た「富貴鳥」「吉利鳥」の傍題を持つ瑞鳥については、関連目録や研究書（『高句麗壁画古墳』85、『高句麗壁画古墳』05、『高句麗壁画古墳と東アジア』12 等）でも未詳とされるが、『天地瑞祥志』「禽」には、これらの瑞鳥についての記述がある。さらに該書においては、この二鳥が本来、『山海経』に見る鳳凰、漢以降に凶兆の要素をも得た凶鳳「發明、焦明、
肅 + 鳥 / 霜 + 鳥」、幽昌らと同じ鳳グループに括られる点に着目しつつ、図像・文献の双方から、漢～隋唐には多くの種類が存在したと考えられる鳳グループの実態を検討する。

平成 27 年度 文献調査

前年度までの調査の記録整理を続行する。さらに漢魏晋南北朝の志怪書及び唐代の祥瑞志について検討を進める。

(1) 漢以降、魏晋南北朝を通じて隋唐迄、『山海経』が与えた影響は、韻文作品のほか博物書・地理書・志怪書に見えるが、その通史的な研究はない。魏晋南北朝の志怪書の筆法は、形態の特徴・生態などを誌す『山海経』のそれに一致し、『山海経』の異域・異物等を踏襲した博物的描写がなされる。こうした『山海経』の博物的描写を引く志怪書としては、漢・東方朔『神異経』、『十州記』、漢・郭憲『洞冥記』、魏・張華『博物志』、晋・郭璞『玄中記』等、「図像」に基づくものとしては『外国図』、『括地図』等があり、また前秦・王嘉『拾遺記』や北魏・酈道元『水経注』等の北朝の志怪的地理書も同じ『山海経』の系譜にあるとされるが、従来の志怪研究では、これらに関する系統的研究は無い。よって本研究では、志怪書に見る『山海経』の博物記載（異域・異物等）に的を絞って、『山海経』原文をそのまま引く or 換骨奪胎した博物、各書物に共通する or 独自の博物等を割り出し、魏晋南北朝の志怪書にみる『山海経』の博物・異域のイメージ受容の実態とその背景を探る。

図像調査

六朝～唐成立の瑞祥志の図像調査を行う。郭璞に於ける「馬」が天に属す「龍」として認識される点、『天地瑞祥志』所録の「龍・龜」の文献考査を踏まえ、現存する「龍・龜」の最も纏まった作例、かつ『山海経』に関する経文を持つ南北朝～唐代の瑞祥図として貴重なフランス国立図書館蔵のペリオ文書 p2683『瑞応図』を調査する。

平成 28 年度 文献研究

前年度までの調査成果を整理記録する。さらに、郭璞・張駿『山海経図讚』、漢以降の志怪書を検討する。

(1) 清・嚴可均に拠れば、『道蔵本』所収『山

海経図讚』には張駿『山海経図讚』が混在する。留意すべきは、郭璞と張駿の『山海経図讚』の成立背景に共通の政治・文化的基盤が推測される事である。これらから推測できるのは異族との衝突相次いだ南北朝初期、中国古来の『山海経』の神話的図像イメージが漢文化の象徴という政治性を以て用いられた可能性である。よって史書・類書に伝えられる張駿の伝を網羅的に洗い出し、張駿『図讚』に関する地域・時代的背景を探る。

(2) 『山海経』の血脈を引く漢魏晋南北朝の志怪書には「人面の魚・獸」の記載はとくに多いが、「魚・獸面で人身」のパターンとの違い等については未検討のままである。よって本研究ではそれらを網羅的に抜粋・整理、その成果を六朝の『山海経図讚』研究と併せる。

図像研究

張駿『山海経図讚』の図像的側面を探るため、敦煌研究院・王旭東副院長の協力のもと、佛爺廟湾魏晋墓にみる傍題つき「瑞魚」「飛魚」、張掖高台縣魏晋墓の「仙人飛魚」に比定される有翼の魚を取り上げ、その名称と吉凶判断、性格について考察する。

4. 研究成果

唐の法典では最も重要な祥瑞（大瑞）に分類される「吉利・富貴」という従来未検討の祥瑞について、日本・朝鮮半島および中国周辺部のみならず断片的に現存する関連の祥瑞図像・文献を繋ぎ合わせ、その成立と受容について検討した。

中国に現存する「吉利・富貴」の関連情報は六朝梁・孫柔之『瑞応図』にみる「獸頭鳥身」との逸文に留まる。これに対し日本にのみ現存する吉利・富貴をめぐる情報（『延喜式』「治部省」、唐・薩守真『天地瑞祥志』）に基づけば、その獸頭鳥形の吉利・富貴は、本来一対の祥瑞とされたことがわかる。しかしこの一対の瑞鳥の「効能」と「形態」をめぐる、他の文献にない情報を伝える唐の祥瑞専門類書『天地瑞祥志』の記述に於いても「読点」が付されないため、それが「獐・牛」の「頭」であるのか、「獐・牛」の「頭足」であるのかについては判然としない。そこで、この問題を解決する鍵を、5 世紀初めの高句麗古墳群の一つである徳興里壁画古墳（北朝鮮人民共和国・大安市徳興里）にみる関連の「図像」に求めた。

徳興里古墳の前室天井西北部の一連の神話神仙・祥瑞図には「吉利之象」「富貴之象」の傍題をもつ獸頭鳥身の図像が確認されるが、目下、出版される最新の図録類の説明文でも、それらが「瑞獸」か「瑞鳥」であるのかについてすら判然としない。よって、敦煌本『瑞応図巻』及び『天地瑞祥志』に残る吉利・富貴をめぐる図像・文字情報を繋ぎ合わせ、それを徳興里古墳の吉利・富貴之象の図像の伝える形状・色彩を対照してみたところ、『天地瑞祥志』の吉利・富貴の記述は、獸（獐・牛）の「頭足」をもつ鳳凰として読むべきことが判った。

他方、この獸頭獸足という特徴をもつ一対の

吉利・富貴が「異形の鳳凰」に作られたことをめぐっては、同じく徳興里古墳にみえ、「吉利・富貴」との間に多くの共通点をもつ異形の鳳凰「千秋・万歳之象」の図像・文献と共に考えた。その結果、それらが魏晋以降の讖緯・道教等の神秘説興隆の下に誕生した異形の祥瑞であり、ともに『山海経』の鳳凰の系譜を継ぐものとして誕生したものであるものであることが明らかになった。とくに吉利・富貴については、同じ預言書でも緯書のそれではなく、『山海経』の原始的な吉凶をめぐる筆法をそのまま踏襲する点から、『山海経』との関わりが深いものと考えられる。

しかしその『山海経』の鳳凰にみるように、古来鳳凰が「天下に安寧をもたらす吉兆」であったにもかかわらず、「吉利・富貴」があえて「吉祥句」を「名称」とするのはなぜか。その答えは、吉利・富貴が、漢唐間の鳳凰に関する災異の歴史を合理化するために誕生した「凶鳳」すなわち、六朝末～唐の祥瑞図においては鳳凰の冒頭に掲げられるほど重視された「四羽の凶鳳」をアンチテーゼとしつつ、「吉兆」としての鳳凰の真面目を取り戻すべく新たに成立・受容をみた、「乱世の吉鳳」であるため、と考えた。

最後に、各種祥瑞・瑞応図の内容形式的共通点を比較確認したうえで、現存する「祥瑞図とその説明文」を兼備する唯一の作例である敦煌本『瑞応図巻』「鳳凰」の項目の「四凶鳳」に続く欠損部分には、本来、『天地瑞祥志』第18禽の巻頭「鳳凰」に四凶鳳に続けて掲載される「吉利鳥・富貴鳥」をめぐる「瑞応図」の佚文と同類の説明文が記載され、その図像は徳興里古墳の「吉利・富貴之象」と同様のものではあった可能性を推測した。

なお、当該論考に関する招聘発表を、以下の3カ所において行った。1、立教大学日本学研究所に於けるシンポジウム「立教大学日本学研究所第57回研究例会」2016年10月22日【口頭発表業績】、2、国立民族学博物館におけるシンポジウム「驚異と怪異 想像界の比較研究」2016年12月4日【口頭発表業績】、3、台湾中央研究院におけるシンポジウム「劉宋：多視角的断代研究」2017年3月14日【口頭発表業績】。

(三国時代まで「鳳凰の出現に反して王朝は滅びた」との歴史を合理化するものとして誕生した四羽の凶鳳を踏まえつつも、「吉利・富貴」についてはより「民間的」な色彩が強いことを、上記口頭発表(3)において新たに指摘された。各氏からの指摘内容を踏まえ加筆修正した中国語版は、2018年度秋期発行の、台湾中央研究院『中国文哲研究通訊』に掲載予定。)

『山海経』の吉良に淵源する白馬朱鬣とセットのものとして示された「車馬の瑞」は、唐代玄宗期成立の法典においては最高品第の祥瑞となるが、従来の研究には、この「祥瑞としての山車」について述べたものは皆無である。よって主に漢唐間の史書や文学作品に基づき、「祥瑞としての山車」の成立と受容について検討した。

山の出す車の瑞の嚆矢は『礼記』だが、山車の受容史上、重要な役割を果たしたのは六朝後半の国家文書に示される「沢馬」と一對の「山車」という車馬の瑞である。それは後漢の天地山川の儒家的国家祭祀・封禪を経て生まれた「受命の王朝・天子」を嘉す「山川の出す車馬の瑞」、および魏晋六朝の史書の礼制において皇帝の至高性を可視化する「皇帝の金根車」の前身たる「殷の瑞山車」、という二つの淵源がある。

両者が融合したのは、祥瑞を修辭に多用する南朝の国家的美文を継承発展した六朝末の徐陵の優れた修辭的公用文においてであり、その山車は軍人皇帝の至徳と共に武勲をも嘉すものとして示された。

それはさらに庾信の国家讚文に北朝の武断政治を美化するものとして継承され、唐の封禪文に於いては徐庾を継承する形で現れる。強大な皇権を象徴する山車の瑞は、軍人皇帝の武勲をその至徳と矛盾しない形で言祝いだ美文家達による優れた文学を経て初めて、唐には重要な瑞として国家文書に掲げられ行政法典に記録されるに至ったものと考えられる。

日本にのみ現存する唐の祥瑞専門類書『天地瑞祥志』には山車の傍題を持つ図が伝わること、中国浙江省海寧三国画像石墓の祥瑞図には山車に似た山型の図があることから、日中に現存する各種図像および文献資料を総合し、海寧墓に見る山型の図像について再検討を行った。

『礼記』に淵源する山の出す車の瑞が皇帝の至徳と武功を象徴する山車の瑞となるのは、魏晋六朝の公文書に於いてである(六朝後半の国家文書に於ける山車の受容については、海寧墓の研究から離れるため別稿に纏めた)。

他方、海寧三国画像石墓が三国呉の孫権の女の墓に比定され、その孫呉の王朝草創期に史書の山車に通じる黄金車が現れたとの伝があること、漢唐間の傍題付き墓葬画像に欠ける主要な祥瑞は山の出す車の祥瑞図のみであること、前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』に描かれる図像がある程度正確性を保つことなどを総合し、目下、『山産玉璧』に比定される海寧三国画像石墓に見る山型の祥瑞図が、後漢以降、次第に強い皇帝権力を顕示することとなった山の出す車(山車)の図像例である可能性を指摘した。

なお当研究については、台湾国立政治大学における国際学会(2016年6月5日「出土文献視野与方法国際研究学術研討会」)において口頭発表ののち、論文化を進め、中国大陸の雑誌に投稿、掲載された【口頭発表業績】。

『山海経』にみる馬についての基礎的文獻調査を行った。とくに「乗れば長寿になる」という神仙的要素を持つ「吉量(良)」「乘黄」について、唐代にむけて皇帝シンボルとして受容される過程について整理した。

A 漢代の経書注釈に多い皇帝の駱 = 白馬黒鬣の筆法を踏まえ、『山海経』にみる西方犬戎の白馬朱鬣の神仙馬「吉量(良)」が、緯書『礼緯』に

において「周文王の瑞たる白馬朱鬣」に变身したと、その天意を保証する緯書的な白馬朱鬣が、唐までには主に史書の礼制において、強い皇権を示す皇帝の瑞馬として受容された可能性について考えた。B 漢唐間の礼制において皇帝シンボルとなった白馬朱鬣の吉量(A)のほか、『山海経』を継承する六朝の志怪書『神異経』にみる神仙の乗馬たる西方異界の白馬朱鬣を踏まえ、初唐には老子遠祖伝説において、唐李王朝及び唐太宗の受命をも保証する神仙の祥瑞として「老子の乗馬たる白馬朱鬣」が示された可能性を考察した。AB については、今後、順次、論文化の予定。

画像調査については、妊娠出産復職後の体調不良から、まとまった成果は出せなかったものの、国内学会参加および国内外での画像調査としては、以下の調査を行った。

- 1、国立歴史民俗博物館におけるシンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」への参加(2017年10月21日)。
- 2、慶應義塾大学におけるシンポジウム「驚異と怪異の場 <自然>の内と外」(2017年11月1日)。
- 3、国立民族学博物館における鳳凰画像の調査(2018年2月19 - 20日)。
- 4、大阪市立東洋陶磁美術館における展覧会「唐代胡人俑」に出典された北方騎馬俑の調査(2018年2月19 - 20日)。
- 5、台北市内道観における神仙道教的な神獣の調査。(2018年3月13-15日)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

松浦史子

「“山産玉璧”再考 - 海寧三國画像石墓中の山車画像研究」

華東師範大学芸術研究所『中国美術研究』

査読有り、2016年第4期、No20、26-36頁

松浦史子

「祥瑞としての山車 乱世を統べるかたち」
早稲田大学中国詩文研究会『中国詩文論叢』査読有り、2016年12月、第35集、19-40頁

松浦史子

「獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について - 乱世を翔る吉鳥たち」

早稲田大学中国詩文研究会『中国詩文論叢』査読有り、2014年12月、第33集、45-67頁

[学会発表](計 4 件)

松浦史子

於台湾中央研究院「關於獸頭の鳳凰「吉利・富貴」---(臯羽)翔于乱世的吉鳥」

中央研究院研究院劉苑如教授主催

「劉宋:多視角的断代研究」

コメンテーター 国立政治大学華人宗教研究中心主任及び中央研究院中国文哲研究所合聘研究員 李豊楸教授

2018年3月14日

松浦史子

於国立民族学博物館「東アジアに於ける異形の表象と政治・文化 獸頭の鳳凰について」

国立民族学博物館山中由里子准教授主催「驚異と怪異 想像界の比較研究 研究会」

(代読 日本学術振興会 PD 研究員 佐々木聡氏)

2016年12月4日

松浦史子

於立教大学「獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について - 日中韓の祥瑞関連史料を手がかりに」

立教大学文学部鈴木彰教授主催「立教大学日本学研究所第57回研究例会」

(代読 藤女子大学 水口幹記准教授)

2016年10月22日

松浦史子

於台湾国立政治大学「考察海寧三國畫像石墓中可見的祥瑞圖 再探「山産玉璧」」

台湾国立政治大学中文系主催「2016 出土文献研究視野與方法國際學術研討會」

(代読 青山学院大学非常勤講師 福田素子氏)

2016年6月5日

[図書](計 1 件)

植木久行編

『中国詩跡事典 - 漢詩の歌枕』

共同執筆(全618頁、2015、研文出版)

松浦担当範囲

「碣石山・山海関」、「恒山・北岳廟」、「大同(雲州)・雲崗石窟・華嚴寺」、「懸空寺・木塔」

2015年3月

6. 研究組織

(1)研究代表者

松浦 史子 (MATSUURA FUMIKO)

二松学舎大学・文学部・准教授

研究者番号 80570952